

満蒙開拓義勇軍から

第二十八師団

愛媛県 南 條 義 雄

満蒙開拓義勇軍は、私にとって軍隊でない軍隊で、軍隊に優る体験というか教育を受け、現在に至るも義勇軍の日々が我が体の中に滲み込んでいる。

中国東北部、所謂、あの広漠たる広野には今もなお赤い夕陽が映えているのであろう。たたき込まれた、あの訓練の日々ではあるが、過ぎ去った夢は美しい。

思えば、満州の興亡は僅かの十三年間である。私の軍隊生活は、満蒙義勇軍により、その基礎を作られ、精神的にも肉体的にも私達を完成させたのである。

私の経歴は、

大正十一（一九二二）年一月六日 愛媛県周桑郡丹原町で生まれる

昭和四（一九二九）年四月 桜樹第一尋常高等小学校入学

昭和十二年三月 同校卒業

昭和十三年七月 満蒙開拓青少年義勇軍へ入隊、

ソ満国境警備中隊志願、鏡河国境守備隊

昭和十七年十二月 第二十八師団（豊兵団）山砲

中隊入隊（黄河）

昭和十八年十二月 南方方面へ転戦命令、

沖繩県宮古島へ上陸

昭和二十年四月 沖繩本島作戦参加

昭和二十年八月 終戦

昭和二十年十二月 石川捕虜収容所へ投降

昭和二十一年十月 復員

第二十八師団は、関東軍の予備軍として満州の北中央に駐留していたが、主作戦地域は、東北部

佳木斯の北方の虎林方面であった。

東北部の黒竜江沿岸は広い湿地帯で、山砲でないとい行動できぬ人跡未踏の地域であった。

ハルピンの冬は零下三〇度〜四〇度の厳寒になり、耳当ての付いた防寒帽、防寒靴や防寒外套、厚手の手袋を用いていた。靴の中には慰問袋に入っていた唐辛子を入れて寒さを凌いだと言う人もいる。

初年兵の中には、鼻先や手先に多くの凍傷ができた人もいた。ハルピン市の緑や煉瓦色のロシア風建物が印象的であった。

このような寒気の厳しい満州から亜熱帯の沖縄宮古島に移動したのは昭和十八年の十二月であった。北方ロシア対処から、南方戦線が厳しくなり、特にフィリピン、台湾、沖縄と、本土周辺の守りが必要になったらしいと、その変化をヒシヒシと感じながらの沖縄移駐であった。

宮古島では陣地構築に全力をあげ、連日の空襲

で、グラマン爆撃機から放つロケット砲弾のうなる音は心胆を震え上がらせた。もうその頃は沖縄本島攻撃が主で、宮古島は孤立されているようにしたが、勿論、我々には知る由もなかったのだ。

我々は厳寒の満州から宮古島、沖縄と転戦したのですが、南へ行った沖縄は玉碎し、満州に残った人達はソ連と戦い、終戦で、シベリア抑留、重労働でした。戦いの運、不運は、我々が予測できぬ運、不運であったのでした。

二二〇〇キロの行軍

長崎県 田浦 国男

国の為 命捧げる時来たり

涙かくして 送る父母

昭和十七（一九四二）年一月十日、現役兵として、長崎県大村市の西部第四十七部隊歩兵砲隊に